古 代 史 散 策

No. ０１２

山辺の道南部③

パナソニック電工松寿会
古代史散策部

昭和54年10月作成
平成８年６月復刻
平成15年９月３刻
平成28年６月４刻

〈 コ ー ス 〉　7km

近鉄天理駅 ― 天理教本部資料館 ― 石上神宮 ―
内山永久寺跡 ― 丹波市古墳群 ― 夜都岐神社 ―
竹之内環濠集落 ― 下池山古墳 ― 大和神社 ―
JR長柄駅 …解散

≪ 総　説 ≫

【山の辺の道】

山の辺の道は、標高65～90m前後の、所謂大和高原の 西の山麓を蛇行しつつ、南は磐余の地（現桜井市付近）より北は奈良坂に至る道であり、上代の大和盆地の葦繁き湿地帯を避け、人の行き交う道となる以前にはおそらく“けもの道”であったのであろう。

山間と平地の物資交流を結んだ自然道は、やがて軍事的にも祭祀的即ち政治的にも重要な道となっていったのである。

10崇神陵，12景行陵の名に、いずれも“山の辺の道”を冠してあり、この道が古くより開け、古代より山辺の道と云い継がれた証である。

山辺の道は、現在は山の上方へと求めんとしているが、往古は、山麓一帯は深い自然林に覆われていたに違いなく、また現在一般に云われている山の辺の道なるものは、戦後に作られた“東海自然歩道”とは似て非なるものである。

16仁徳記：磐の媛皇后　望郷の御歌

「つぎねふや　山代河(やましろ)を　宮上り　吾が上れば　青丹よし　那良(なら)を過ぎ　小楯(おだて)　夜麻登(やまと)を過ぎ　吾が見が欲し国は　葛城高宮(かつらぎたかみや)　吾家(わぎえ)のあたり」　古事記　歌謡#５９

25 武烈前記：物部影媛　道行歌

「石の上　布留を過ぎて　薦枕　高橋過ぎ　物多に大宅過ぎ　春日　春日過ぎ　嬬ごもる　小佐保を過ぎ　玉笥には飯さへ盛り　玉碗に　水さへ盛り　泣き沾ち行くも　影媛あはれ」　　日本書記　歌謡 94

の記紀歌謡に詠い込まれた「那良」「夜麻登」「石上布留」「高橋」「大宅」「春日」「小佐保」の地名は、確かな証拠は見当たらないが、おそらく山の辺の道の沿道集落なのであろう。

この道沿いには古代有数の大豪族の多くが蟠居した。

磯城，巻向，磐余　――天皇家
三　輪　――――――――神ノ君（三輪氏）
大市，桜井　――――――大伴連
山　跡　――――――――大倭国造家
石上布留　――――――――物部連（布留宿祢）
和迩，櫟本　――――――和迩臣，櫟井臣，柿本氏　｜同
春日，大宅　――――――春日臣，大宅臣　　｜族

これらの大豪族興亡の歴史に思いをいたせば、如何に山の辺の道が、古代の政治，祭祀，軍事，経済に重要な動脈であったかが察せられるのである。

大和盆地が次第に隆起して、湿田は乾田化するのであるが、その時期に我国最初の官道“上ッ道”が、山の辺の道西側低地に開かれるに及んで、自然道山の辺の道は遂に忘れ去られ、やがて農道に名残りを止めて消滅した。

【天理市】　　（旧丹波市町。昭和 29 年 6 町村合併）

天理教の本部の地であることは云うに及ばない。

大和盆地のほぼ中央に位置し、古代農耕に於ける大和国の穀倉であった。丹波は田庭であり、古代語の“庭”は「食料の豊富に収穫される場所」の意味を持っていて、陸，海ともに用いられた。

人麻呂の羈旅歌(旅を詠ったもの）８種のうちに、

飼飯の海の　庭よくあらし　苅薦の
乱れ出ず見ゆ　海人の釣船　　万葉集巻３　＃２５６

の“庭”も然りで、魚介，海藻の豊かな海域と云うことを理解しなくては、この歌趣は判らない。

《　各　説　》

【天理教本部資料館】　　天理市三島町

この町に本部を置いた天理教祖中山みきが、天保９年（1838)親神の教えをひらいて以来急速な発展をとげ、内外の信徒数は数百万に及び、各地からここへ“お地場帰り”する信徒の宿舎（詰所）がいたるところに甍を競っている。

＊お地場…信仰の中核をなす神殿中央の甘露台を人類発祥の地という意味で呼んでいる。

本部の東側にある“おやさとやかた”の４階に資料館があり、天理教に留まらず多数の国宝・重文や世界の貴重な資料が展示されている。

【式内名神大社石上神宮】　　天理市布留町

正しくは、石上坐布留（布都）御魂神社。別名布留社。

布留河の河辺の神奈備、布留山麓の深い瑞籬。元は地主神を祀っていたのであろうが、ここに天皇家の霊剣を祀るに至り、大和朝廷の祭祀即政治の一大拠点となって行ったのであろう。この地は大和のほぼ中央にあたり、大和を防衛する軍事上の要衝であったであろうことは、12垂仁皇子印色入日子が茅渟の菟砥河上宮（鳥取の河上宮＝現 阪南市東鳥取か？）の深日鍛冶谷で剣千振を鍛えて、始め忍坂邑に納め次いで石上神社に移したと伝え、大和朝廷の武器庫となった。祭祀者が武人物部氏であったことからも察せられる。

祭神の布留御魂は、建国の功臣武甕雷神の帯びた霊剣と云い「神武東征のみぎり、熊野で大熊に出会い、その毒気にあたられ御軍共々昏倒された時、武甕雷神は己の霊剣を降してこれを助けたと云い、神武即位後、宇摩志麻治命（父饒速日命，母長髄彦の女登美夜毘売）をして宮中にこの霊剣を祀らしめ、後、崇神天皇は、伊香色雄に勅して、石上布留の高庭に鎮めしめ、色雄は祖神饒速日命の瑞宝と共に、祭具管理者となった」とある。以来物部氏累生の奉仕するところとなった。

《発掘された神剣》

「布留社縁起」によれば“神剣 韶 霊 霊崇あるによって石櫃に安置し、ここに斎埋す”とあり、明治７年、禁足地高庭を発掘するところとなった。

菅政之氏は、その著書「神剣の説」の一節に「明治７年８月、禁足地を開き奉りしに、神剣再び光を世に現し勾玉従って古昔の美麗を輝かし……云々」と。この時発掘されたのは、

剣１振の他に鉾(折) ４, 同柄４, 青玉の勾玉 11, 青管玉 252 , 丸玉９，大緑石１，鈴１であった。

百済国伝来“　七支刀　”　国宝　金象眼銘文

銘　文

泰和四年□月十六日　丙午正陽　造百練鋼七支刀　□辟百兵　宣供供候王　　□□□□作

先世以来　未有此刀　百済国世子寄生聖音　故　為倭王旨造　　伝不□世

※泰和４年(369) は、中国東晋の大和４年に相違なくこの時期の百済は 13 代近肖古王が高句麗に対し猛然として大攻勢に出、370 には高句麗故国原王を戦死せしめて意気軒昂たる時であった。東煤けに朝貢して東晋孝武帝より「鎮東将軍領楽浪太守」として冊封された。(372)

古朝鮮の史書「三国史」の記事と銘文は、年号，王（世子）名共一致し、史書と現物が正しく照合する貴重な遺品であり、歴史上の価値は極めて高い。

○拝殿…国宝　白河天皇が永保元年(1081)宮中の神嘉殿を寄進。全国現存拝殿中最古。

○楼門…重文　棟木墨書　文保２年(1318)後醍醐天皇即位と同年

○摂社式内出雲建雄神社拝殿
　…国宝　内山永久寺の鎮守住吉社拝殿を移築。

○瑞籬…神霊の降臨を仰ぐ神籬。照葉樹の籬をめぐらす聖地。現在は石材。

＊柿本人麻呂歌碑

“未通女等が　袖布留山の　瑞垣の

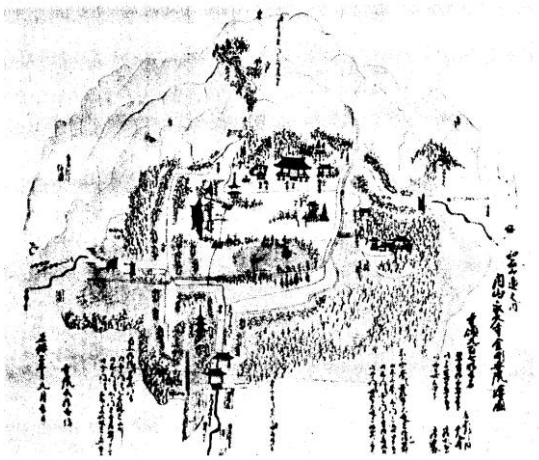
久しき時ゆ　憶ひき吾は”万葉集巻 4＃501

【内山永久寺跡】　　天理市杣之内町

金剛乗院（真言宗）　鳥羽天皇永久年間(1113～1118)

勅願。内山真乗房亮慧開基と伝える。五町四方、堂塔伽藍多数と云う。

内山永久寺古図



当山派山伏の法頭で、吉野金峰山との関わり深く、当寺住職は修験の正大先達になった。

元弘元年(1331)後醍醐天皇が、笠置落城の後捕らえられて南都内山（萱御所）に幽閉された所（太平記巻３）で、当時の住職光賢は南朝に信任され、河内観心寺座主ともなった。

寺領千石。明治８年の廃仏毀釈の嵐に絶滅した。

【丹波市古墳群】　　天理市杣之内町

○西山古墳…全長 183 mの日本最大の前方後方墳。周濠を巡らせ、竪穴式石室を持つ

○東乗鞍古墳…（北山）全長 72mの前方後円墳。組合せ式家型石棺２個を持つ横穴式石室が開口する。

○西乗鞍古墳…全長 120 mの前方後円墳。周濠の痕跡あり、埴輪の破片散乱出土。

この他、大塚（塚穴山）峯塚（円墳・切石の横穴石室）等、各時代の古墳が多数独立して群在する。

【式内夜都岐神社】　　天理市乙木町

式社は「元は南方竹の内の十二神社にあったが、竹の内と乙木が土地替えし、神社は元春日社のあったこの地に遷した」と、古老は伝えている。従って現祭神は、武甕雷, 姫大神, 経津主, 天児屋根であり、明治維新までは神饌を春日大社に献じ、61 年毎に大社の二の鳥居を当社に下付された。現神殿は春日若宮の社殿を移築したものである。東方山地に鹿足石あり。

【竹之内環濠集落】　　天理市竹之内町

中世の自衛・用水等のための周濠農村。現在は僅かにその一部が残っているに過ぎない。

【下池山古墳】　　天理市成願寺町

下池山古墳の属する大和古墳群は、西殿塚古墳（衾田陵）を中心に構成されている。

古墳は、全長 120 m。平成７年、奈良県の後方部の発掘調査により、その中央部分の南北に長い竪穴式石室から、くり抜き式木棺が出土し話題を呼んだが、それから３世紀末～４世紀初めに築造された最古級の前方後方墳であることが判った。

木棺は、荒野槙（こうやまき）の丸太を縦に割って中をくり抜き、蓋の一部が残っていた。木棺の両端は腐食していたが、長さ５m、幅 80 恕、くり抜き部の深さ 17 恕で、断面は底の平らなU字形であった。木棺が残るケースは極めて珍しく、古墳時代前期（３世紀後半～４世紀末）では、破片ばかりの出土例があるだけである。

又これまでの竪穴式石室上部は、天井石を粘土で覆った例が多いが、この古墳は、天井石にまず真っ赤な土を被せ、その上の粘土層を上下から麻布でパックした初めての構造であった。

付近には、西山塚古墳（前方後円墳）、波多子（はたご）塚古墳（前方後方墳）などがある。

【大和神社】　　天理市神泉町

式内名神大社　大和坐大国魂神社（おおやまとにいますおおくにみたま）

国魂神は、国守護の地主神（国津神）である。おそらく出雲系や天皇家が、ヤマトに進出する以前からこの地を押さえていた、土着種族の祖神であったと思われる。

相殿には八千矛（やちほこ）神，御歳（みとし）神を祀り、主殿と併せて３座。

八千矛神は大穴持（おおむなち）神即ち大国主神の別名と云い、稲穀、神の御歳神は素盞嗚尊（すさのお）と神大市比売（かみおおいちひめ）の間に生まれたという大歳（おおとし）神の子と伝承されている。

大和の最高神の本拠に、出雲の主神大穴持の神を併祀せざるを得なかったと云うことは、出雲系が大和の地を奪って、その豪族を配下に組み入れたことを物語る。また古事記に述べられている神代の系譜を辿ると、大国魂神を御歳神の異母兄に仕立てていることも、このことを裏付ける証である。

大和神社の聖林は、垂仁天皇 15 年に、宮中より長の山（長岳寺裏山）に創祀されたと云い、その社殿は鳥羽天皇御代の元永元年(1118)に焼失し、現在地に再建された長の山にはお旅所としてその名残をとどめている。

《大和（おおやまと）について》

「倭」は、古代中国における漢民族以外の周辺の異民族を名付けた卑称であり、魏志東夷伝の倭人条（魏志倭人伝）に用いられていることはよく知られている。我国では「ヤマト」を中国に倣って「倭」の字を当てたのであるが、「倭」が卑称なることを知るに及んで「和」を用いた。ヤマトは、元ヤマト郷（邑）から興り、次第にその範囲を広げたので、広義のヤマトを「大和＝おおやまと」と呼んで、ヤマト郷と区別したのであろう。後には忘れられて大和＝ヤマトと呼ぶようになった。

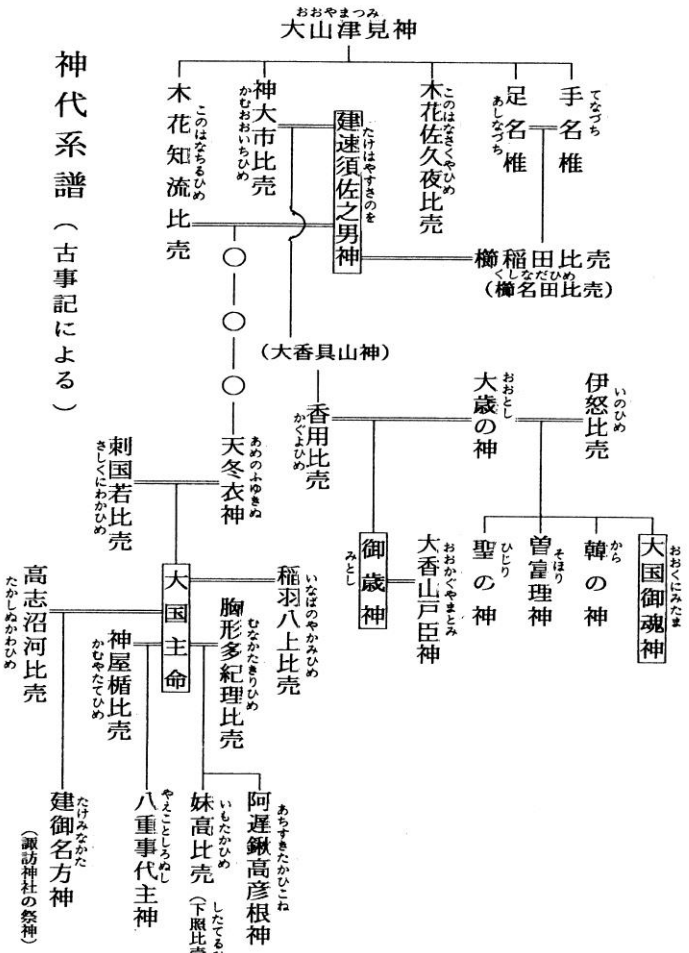
《天皇家と大和》

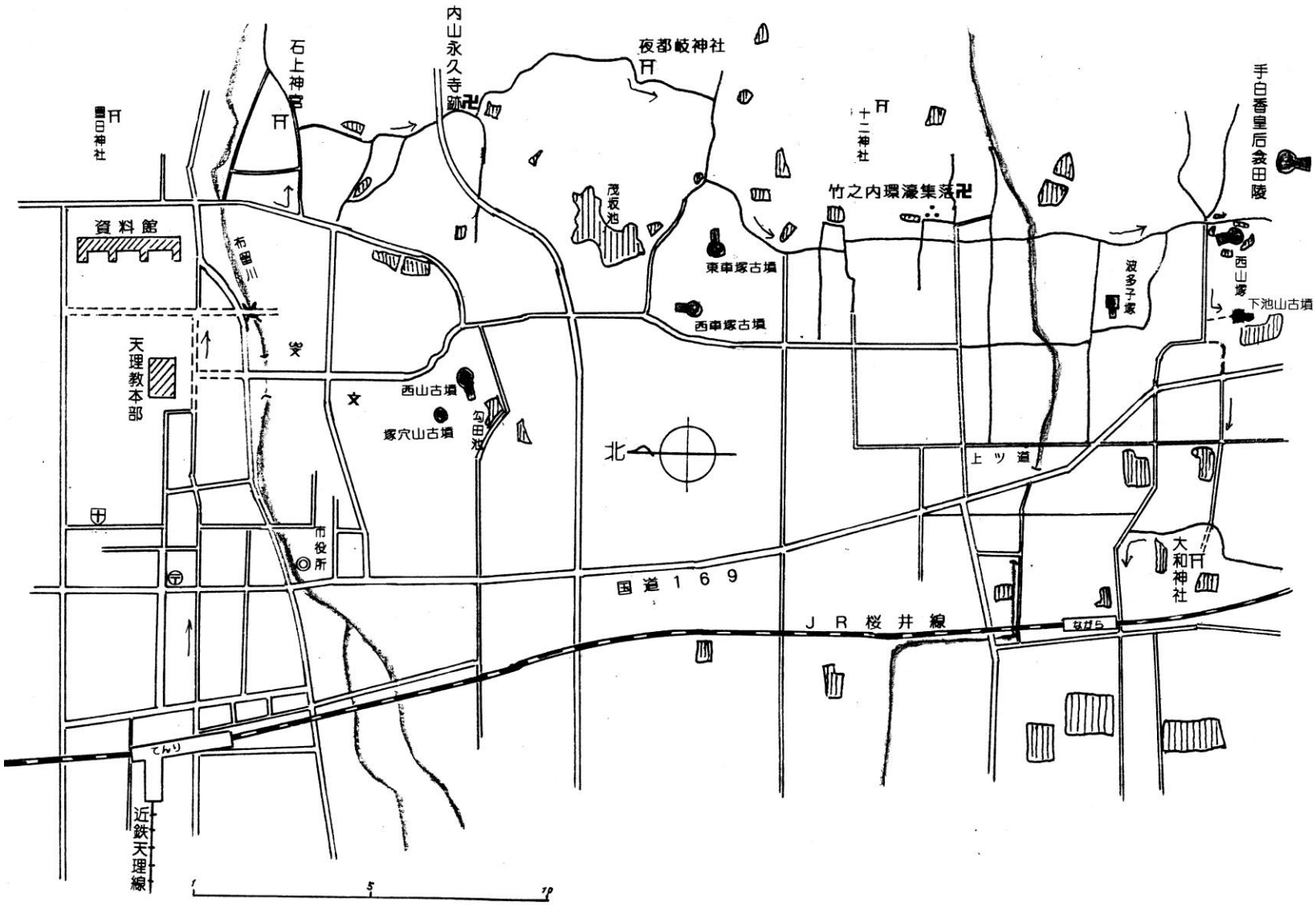
記紀神話は、天皇家の祖神が出雲より国を譲られたとある。国とはおそらく大和盆地であって、今我々が心に描いている日本全体の譲渡ではないと思われる。出雲に伝承していた、国譲り神話を写したと思われる『出雲国造神賀詞（かむよごと）』には「国造りましし大穴持命（大国主命）は、国譲りの後、大和周辺

に腹心の者を配備して天皇家の包囲体制を固めた後、杵築宮（出雲大社の地）に鎮まった」と、あるからである。大国主命は、表面上天皇家に大和を譲ったのであって、祭祀権即ち大和の政権までを譲りはしなかった。崇神天皇５，６年紀によれば倭大国魂神を妹の淳名城入姫に祀らせたが、姫は髪落ち体痩せ祀り得ず、国内疫病多く百姓離反した。天皇　大物主神の夢の告により、倭大国魂を倭の豪族倭直、市磯長屋市を祭主として祀らせ、大物主を茅渟県（和泉国の古称）に、大物主の子大田田根子を見つけてこれに祀らせ国内愈々納まった」と云う。

大和国魂は、海人系部族と関わりが深かった。神武東征の時、速吸の門（豊予海峡）の漢人で、水先案内をしたという椎根津彦（ウヅ彦）は、倭直部の祖と云い。淡路島に式内大和大国魂神社があって、この地（崇神陵の西）に淡路島を最初に造ったと云う伊射奈岐神を祀る、式内伊射奈岐神社が鎮座するのである。

作成　西村　誠・改訂３刻　末岐敏一
案内・解説　藤岡隆義・坪内邦彦




内山永久寺跡
石上神宮
夜都岐神社
十二神社
手白香皇后衾田陵
資料館
柜田川
茂坂池
竹之内環濠集落
東車塚古墳
西車塚古墳
波多子塚
西山塚
下池山古墳
天理教本部
西山古墳
塚穴山古墳
勾田池
北
上ツ道
市役所
国道169
JR桜井線
大和神社
てんり
近鉄天理線